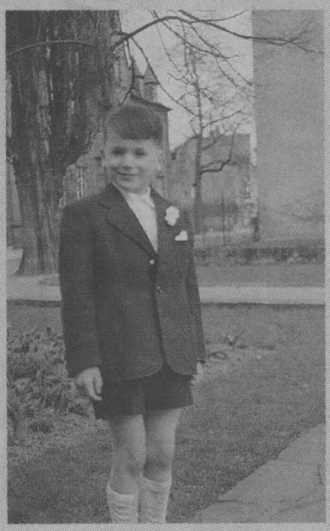
（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

文字を学ぶ

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　4

生徒の注意を引くために、大事だと思われることを何回も提示し、繰り返し教えたりするところは、通常、「学校」と呼ばれる。現代の文明社会で生まれ育った人間であれば、そこを避けては先に進めないというのが現実である。ご多分に漏れず、私も6歳になった年の次の4月に入学した。通っていた小学校は実家から100㍍のところにあった。実家との間には、地域の新聞社と市役所があるだけだったので、道草する機会はあまりなかった。無論、電車の遅れを理由にして遅刻することもできなかった。



入学時の記念撮影（55年）

新たな驚きと発見の連続

年は1955年。戦後のベビーブームで、どこの小学校も一クラス50名以上と、教室が子供でいっぱいであったように思う。授業の合間の休憩時間に校庭で鬼ごっこをした。ベルが鳴って、教室に戻るとき、入り口の階段の下できちんと2列に並んで進んだことを今でも覚えている。（少なくとも表面的には）秩序正しくみえるこのような状況は、当時の日本も大体同じようなものだったかもしれない。体罰も容認されていた古き良き時代であった。

その頃はまだ、町のいたるところに戦争の傷跡が残っていた。実家の裏側にも、爆撃で壊れた家が、そのまま廃墟として残っていた。この「廃墟」しか知らない私は、まわりの大人達と違って、その存在を当たり前のように考え、現実として受け止めていた。何故こうなったのかと追求できる年齢ではなかったであろうし、「爆撃された家」という単語を知っていても、「爆弾」の実感がなかったのである。

その代わりに私が驚かされたのは、学校での一つの科目であった。

日本で「国語」と呼ばれている科目は、ドイツでは〝Deutsch〟、つまり「ドイツ語」である。文字を知らない私にとってそれを学ぶことは興味深い新しい世界であったが、ドイツ語を話すことにはあまり不自由を感じなかったこの私が、何故また学校で「ドイツ語」を学ぶ必要があるのか、不思議に思ったのである。しかも、自分が書く文字もすぐに問題となってきた。手書き文字を自分なりに多少崩した形で板書すると、先生に「間違い」と叱られるのである。そんな時は、少々ひねくれて、「ちゃんと読めるのに何故間違いになるのか」と思いながら席に戻ったものである。